佐渡を世界遺産に

世界遺産登録に向けて

構成資産を知る（その三）相川金銀山②

今回は「佐渡奉行と金銀山」のかかわりについて紹介します。

1603（慶長8）年に徳川家康は、現在の島根県にある石見銀山を治めていた大久保長安を佐渡代官（のちの奉行）に任命し、相川に奉行所を建て、鉱山への道路や港を整備しました。こうして整備された鉱山都市相川は、金銀の算出量の増加とともに大変な賑わいを見せたと言われています。

その後、採掘に伴う湧水や採掘条件の悪化から、金銀山の採掘は一時不振に陥りますが、1618（元和4）年に鎮目惟明（しずめこれあきら）が奉行となると、佐渡で小判の鋳造や山師に資金や資材を提供するなどの改革を行った結果、金銀算出量は元和・寛永期に最盛期を迎えることとなりました。

17世紀後半になると、鉱石を掘る場所がしだいに深くなり、「水との戦い」が急務となりました。その時に奉行をつとめた荻原重秀は、1691（元禄4）年から5年の歳月を経て排水坑道である「南沢疎水道」を完成させ、金銀の生産は再び増加に転じました。

18世紀半ばに奉行をつとめた石谷清昌（いしがいきよまさ）は、奉行所敷地内に金銀製錬施設を集めた「寄勝場（よせせりば）」をつくり、町のあちこちに分かれて仕事をしていた精錬業者をそこに集めて作業の効率化を図りました。

江戸時代初期から幕末にかけ、約120人もの佐渡奉行が任命され、相川金銀山は江戸時代を通じて金銀の生産を続けるとともに、徳川幕府の財政を支えることとなりました。

南沢疎水道

問 産業観光部世界遺産推進課 ☎63―5136

佐渡ジオパーク

ジオパーク、推進日記 92

巨大なすき間はどうやってできた？

青盤脈は、長さ約2．1㎞、深さ約500m、脈幅約6mのとても巨大な空間に詰まった鉱脈です。なぜこんなにも巨大な空間が存在したのでしょうか？

岩石は、押されたり引っ張られたりしてずれることがあります。そのような場所では地震を伴いながら大地が割れたり、持ち上がったりしています。

青盤脈の巨大な空間は、引っ張られる力によって形成されました。大昔、地下からマグマが上昇したことで、大地に割れ目を作りました。お餅がふくらむ際に、表面にひび割れが入るように、地下からのマグマの力によって大地が引っ張られることで、いくつもの巨大な空間が作られたのです。

その後、一度海の底へ沈んだ佐渡島は地震を繰り返しながら海底から持ち上がり、現在の場所と形になりました。

地球の動きはとてもダイナミックですが、長い年月がかかるため、その動きを人間が感じることはなかなかできません。佐渡では、地球の動きがわかる素晴らしい岩や地層、地形が残されています。それらは現在の私達の生活に少なからず影響を与えています。

人の暮らしとつながる大地の物語を、ぜひ探してみてください。

お詫びと訂正

10月10日発行「市報さど10月号（№176）」の「ジオパーク、推進日記⑨⓪」で次のとおり誤りがありました。お詫びして訂正します。

青盤脈の総延長
誤 約2㎞　正 約2．1㎞

佐渡ジオパーク案内パンフレット

佐渡ジオパーク推進協議会のホームページ（QRコード）から案内パンフレットをダウンロードできますので、ご覧ください。

問 教育委員会社会教育課 ジオパーク推進室（畑野行政サービスセンター内）
☎66―4160